

〈館蔵資料紹介〉

土佐光孚画 賀茂季鷹賛 紙本着色立雛図 (御厨加藤家旧蔵) 本紙八五・二糎×二六・三糎



をみな子のひよな／まつりや／いもとせの／みちを／しふるはじめ／なるらむ 季鷹
画所預従五位下土佐守藤原光孚「光孚之印」(朱陰)

土佐光孚による立雛の図に、賀茂季鷹が着賛した一幅。女兒の成長を祝って桃の節句に掛けられる立雛図に相応しい画賛を認める。作成されたのは、光孚の官位によれば文化三年（一八〇六）十月二十七日から文化八年（一八一七）二月十五日の間（『地下家伝』）。賀茂季鷹は宝暦四年（一七五四）二月六日生、天保十二年（一八四一）十月九日没、享年八十八。京都一乗寺村（京都市左京区）で生まれ、上賀茂神社祠官季栄（叔父）の養子となる。有栖川宮家に諸大夫として出仕したのち十九歳で江戸に下向、国学を身につけ、帰京のちは名実ともに京都文壇を領導する存在となった。土佐光孚は安永九年（一七八〇）四月二十四日生、嘉永五年（一八五二）四月五日没、享年七十三。画所預土佐光貞の男。画所預。従四位下に叙せられ土佐守に任ぜらる。寛政度内裏の清涼殿屏風を、文政元年（一八一八）大嘗会悠紀主基屏風を描く。本幅の他、両者の接点としては、天保元年（一八三〇）三月二十一日、東山碧雲楼において以文会会員によって開かれた尚齒会の記録『以文社尚齒会詩歌集』（以文社蔵板、中野三敏先生所蔵）に季鷹の序文・和歌と光孚の画が見られる。（翻刻解題 盛田帝子）